

本学に限らずどの大学の経済学部においても、マクロ経済学やミクロ経済学といった経済分野は、学生にとって必須の習得科目といっても過言ではありません。(i) ただし、「重要な科目だといわれるから」という理由だけで安易に履修すると、他の科目との関連が分からず効果的な学習ができないといった問題が起きるかもしれません。以下では、私が担当しているマクロ経済学（「基礎マクロ経済学」「応用マクロ経済学」）がどのような学問的性格をもっているか、またこれから4年間の学習のなかでマクロ経済学をどのように捉えたらよいか、簡単に述べたいと思います。

MASAHIRO NAKANO

中野正裕

経済学部助教授。

1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学経済学研究科博士後期課程修了。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。

<http://www1.tcu.ac.jp/home1/mnakano/index.html>

これから マクロ経済学 を学ぶ人へ

1 マクロ経済学はどのような学問か

経済学では失業をともなった不況、低成長、インフレ、デフレや貿易摩擦などに代表されるような経済問題に対して、様々なアプローチで研究が進められてきました。なかでも、市場機構の有効性や限界と関連付けて様々な理論分析を行なう分野は急速に発展しました。(ii) この分野の理論的な基礎は、現在のところマクロ経済学とミクロ経済学という2つの軸から成り立っています。

マクロ経済学は、一国経済を構成する各部門の経済活動の結果を、GDP（国内総生産）、国内消費、国内投資、インフレ率、失業率、政府支出、貨幣供給量、利率といった代表的な変数に集計して観察し、それらの変数の決定因を分析するものです。また景気循環や経済成長といった経済の動きを調べ、政府や中央銀行の経済政策の効果を検討します。(iii) この

意味で実学的な志向が強く、ニュースや新聞で目にする一国の経済動向と関連する現象や経済用語が講義や教科書にも多く出てきます。なお、ミクロ経済学とマクロ経済学は決して独立的なアプローチではなく、密接な関係にあります。近年では、「マクロ経済学のミクロ的な基礎付け」と呼ばれる研究が進み、両者の境界も明確でなくなってきたといえます。

マクロ経済学は、1936年に出版されたケインズ（Keynes, J. M.）の『雇用、利子および貨幣の一般理論』とともに誕生した経済学であるといえます。そのため、その歴史は比較的浅いのですが、政府や中央銀行の経済政策に直接結びつく非常に実践的な性格をもっており、『一般理論』刊行後、これを巡って理論、実証の面から盛んな研究が展開されてきました。(iv)

3 入門書の紹介

ここ数年、大学生向けのマクロ経済学のテキストは初級の入門書から中・上級レベルのものまで、非常に数多く出版されています。なかには入門書レベルでもミクロ経済学的基礎付けや経済成長モデル、実証的なアプローチなどを大幅に盛り込んだものがあり、教科書の構成も多様になってきました。私がこれまで講義で紹介したものとして、

● 中谷巖『入門マクロ経済学』（第4版）

日本評論社

● 井堀利宏『入門マクロ経済学』（第2版）

新世社

の2冊を入門書として挙げておきますが、講義ではこれらを各1冊だけ読めば良い、というスタイルを取らず、ミクロ的基礎付けや経済データの解説に力点をおいた比較的新しいテキストも併せて紹介するようにしています。また、

● 福岡正夫

『ゼミナール経済学入門』（第2版）

日本経済新聞社

はミクロ・マクロを問わず、経済学の基礎理論を総合的に学習するのに良いと思います。最後に、日本経済の現状を包括的に理解するうえで

● 浅子和美・篠原総一編

『入門・日本経済』

有斐閣

を挙げておきます。これらを単に講義の併行学習書として扱うだけでなく、卒業まで繰り返し読むことをお勧めします。それが皆さんの新しい理解や興味につながると思います。



GUNMA
ぐんま
の中心で、
エコノミクス

2 大学でマクロ経済学を学ぶことの意義・面白さは何か

経済学部の学生にとって重要なことは、まず市場機能とその限界、それに対する対応について系統的に理解することだと思います。(v)

理論上、市場が効率的に資源配分を達成する状態をベンチマーク（判断基準）として、それが現実には達成されないのはなぜかを分析する形で、ミクロ経済学もマクロ経済学も発達してきたのです。このような内実を理解しながら、経済分析の有効性を系統的に理解していくことが、経済学部の学生が独自の「社会を見る眼」を養うことにつながり、それによってさらに社会に対する興味が湧き、学ぶことの面白さが実感できるのだと思います。

その意味において、マクロ経済学を学ぶにしても、その準備段階としてミクロ経済学の資源配分メカニズムを理解しておく、または少なくとも併行して学習することで、より一層理解が深まると思います。そのうえで、マクロ経済学の基本的な視野や経済現象のとり扱いについて、学習を進めて欲しいと思います。

i 講義の概要や学習方法の詳細はシラバスや履修の手引き、講義ガイダンス等の情報も参考して下さい。

ii この分野をとくに「近代経済学」と呼ぶことがあります。ただし現在では他の領域との境界が曖昧になり、また経済学全般におけるこの分野のウェイトが飛躍的に高まったことから、意識してそう呼ぶことは少なくなったようです。

iii 他方、ミクロ経済学は市場経済における個々の経済主体（家計や企業）の経済行動（選択）に遡って分析し、結果として生産要素（労働、土地、資本など）の財・サービスに対する配分（資源配分）の状態がどのように決まってくるかを分析するものだといえます。

iv こうした理論面、実証面の発展にともない、新古典派総合やケインジアン・マネタリスト論争、ルーカス批判に代表されるような論争が盛んに行なわれました。また、ケインズの経済学はその後ヒックスのIS-LMモデルに端的に集約され、代表的なマクロ経済モデルとして普及しましたが、現在ではIS-LMモデルが十分に描写できないミクロ的な基礎付け、動学化といった課題に対する試みとして実物的景気循環モデル、世代重複モデルや内生的経済成長モデルといったマクロ経済モデルが発達しており、マクロ経済学のアプローチも多様化しているといえます。

v たまに「市場メカニズムの理論分析を行なう人々（とくに新古典派経済学を分析に多用する人々）は、米国中心の市場型システムを過信しており、そうした人々の意見を反映してわが国経済の市場化、国際化や構造改革が過度に進み、様々な歪みをもたらしている」という発言を耳にしますが、私の知る限り、市場メカニズムがそれ自体万能だと考える経済学者などいません。むしろ、市場機構にベンチマークとして期待される機能とその限界を深く理解することで、様々な領域の社会問題に対して応用的な分析が可能になってきたという点が、現代の経済学を学ぶ面白さではないかと思っています。